

## 浦上キリシタン流配150年(2018~23)

## ニュースレター



## 紙上「乙女峠まつり」 来年を期待して！

乙女峠でお会いできず、残念な5月3日となりました。参加を望んでおられた全国の方々のために、ここで紙上「乙女峠まつり」を開催します。この「流配レター15号」を読みながら、心の中で37人の津和野の証し人の方々の列福列聖を祈って頂けると嬉しく思います。来年の5月3日には必ず実施し、皆様にお会いできることを希望しています。



当日は雨の中、いつもの乙女峠の広場に白浜司教・山根神父・大西神父と津和野教会信徒10名程が参集し、非公開ミサとして11時から行なわれました。悪天候の中、祭壇頭上にテントを張り、信者は立ったままカッパを着たり傘をさしたりしての参加でした。

ミサ説教／白浜 満 司教

### お家でもイエス様と共に歩いていくこと、復活は有る！

“Stay Home”「お家に居ましょう」が、日本国中の合言葉になっているこのGWに、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言の外出自粛の要請を破って、今日ここで皆様と一緒にミサを捧げていることについて、私は正しい門を通っていない薄情な雇人(ヨハネ 10・12~13)であるかもしれないと心配しています。しかし、津和野の乙女峠で拷問の苦しみを受けた方々、とくに命を捧げた 37 名の証し人の信仰を偲ぶ 69 回目のミサだけは途絶えさせたくない、という地元の信者の皆さんの気持ちに動かされ、喜んで司教館を飛び出して参りました。

外出自粛の要請を受けて、皆さんは、お家でどう過ごしておられますか。私は、色々な行事や会議、公式訪問などがキャンセルになりましたが、元々司教館に在宅勤務という形ですので、通勤・通学されている方々の苦労も知らずに、どんなに恵まれた生活を送らせていただいていることかと、痛感しています。それでもやはり、「家の中に閉じ込められている」という精神的な圧迫感があって、この乙女峠に来て、幅、奥行き、高さが 90 センチの 3 尺牢に閉じ込められて拷問を受けた和三郎さんや安太郎さんの気持ちが少し分かるような気がしています。

ところで皆さん、闘わなければならない敵は、まったく違っています。明治初期の浦上四番崩れの際は、信教の自由を認めず、拷問という暴力で改宗を迫る国家権力でした。今回、私たちが闘っている敵は、急速に感染拡大して人間の命を脅かす新型コロナウイルスです。私も、

自分が感染して命を落とすかもしれないという一抹の不安があつて、ここ数日間は司教館の執務室の机の上に、山のように乱雑に積まれた書類を整理し、部屋の片づけをしながら、心の準備をするよい機会となっています。そんな中で、私は今迄以上に、イエス様の復活という福音



によって力づけられていることを強く感じています。イエス様はまことに復活されました！死んでも命の復活があるのです。

新型コロナウイルス感染によって、この体が滅びたとしても、キリストが証ししてくださった復活の命・永遠の命があり、父の家に迎えていただけるという信仰こそが、私たちの心の支えです。乙女峠で拷問のゆえに迫害を受けて命を捧げた37名の証し人は、まさにこの信仰を教えてくれた方々だったのではないでしょうか。今、ここで津和野教会の信者の皆さんと一緒にミサをささげながら、私はキリスト者にとっての“Stay Home”「お家に居ましょう」という霊的な意味を思い巡らしています。私たちにとっての“Stay Home”とは、第2朗読の中でペトロが教えているように「魂の牧者であり、監督者である方のこところへ戻る」(1ペトロ2・25) ことではないでしょうか。復活されたイエス様は、私たちの良き牧者としてともに歩んでくださっています(ルカ24・15参照)。そのイエス様のもとに絶えず戻り、その愛に留まる(ヨハネ15・9~10)という“Stay Jesus”をこれからも心がけて参りましょう。

参考/教区ホームページ(乙女峠の証し人)も御覧下さい。

津和野教会助任司祭 大西勇史 神父

## 特別なことしの「乙女峠まつり」を共にして

2008年神学校3年目のこと。当時神学校の養成者だった白浜神父様に引率してもらい「ペトロ岐部司祭と187殉教者」の列福式に参列した。列福式当日は最後こそ晴れ間が覗いたものの、開始前からバケツの水をひっくり返したような土砂降りだった。式が終わり、揃ってタクシーに乗り込んだ後しばらくして、白浜神父様はこう言った「すごい、雨でしたねえ。いやあ、大変だったですね。みなさん寒くなかったですか。私は寒かったです(笑)でも、あの天気の中、みんなで祈るといふのは列福式にふさわしい犠牲だったかもしれませんね」と。

2020年神父3年目のこと。今年の乙女峠のミサは風呂の水をひっくり返したような土砂降りの中、白浜司教様司式のもと執り行われた。信徒が10名程度しか参列出来ない、いわゆる「非公開ミサ」だったが、当たり前前の助祭奉仕+式次第が飛ばないように手で押さえたり、不安定なマイクスタンドを支えたり、といつも以上に気を配らなければならないミサだった。僕は「証し人、土砂降り、白浜司教様」というキーワードから上述した2008年のエピソードを思い出しながら奉仕をしていた。

ミサが終わり、記念堂でご自分の祭服をご自分で畳みながら(大西、お前が畳めよ。って言わないで)司教様がぼつりと言った。「(雨の中、立ちっぱなしだった)みなさんに、悪かったですねえ。きっと寒かったですよね。申し訳ないですね。でもある意味で、ふさわしい天気だったのかもしれないね」それを聞いた僕は「来年は、みんなで集まりたいですね」と言った。司教様は「そうですね、私、雨男ですけど」とおっしゃって笑っていた。

乙女峠を紹介した、流配レター14号(1月発行)も併せてお読みください。